

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02791

研究課題名（和文）音楽科における資質・能力モデルの構築とその育成のための授業デザイン

研究課題名（英文）The Construction of Lessons in Music Class to develop student's ability

研究代表者

清村 百合子（Kiyomura, Yuriko）

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50423223

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、音楽科で育成すべき資質・能力モデルを構築し、それらを育成するための小学校・中学校における音楽科の授業プログラムを開発することである。研究成果は以下の3点である。まず、発達段階における子どもの認識の内容や方法の違いを明らかにしたこと。2点目は発達特性を踏まえた上で、表現活動および鑑賞活動における資質・能力スタンダードの精緻化をはかったこと。3点目はそれら資質・能力を育成するための音楽科授業デザインの視点を導出したこと。

以上より、本研究では、小学校から中学校の9年間を通じた資質・能力の違いが明確になり、音楽科で育成すべき資質・能力の系統性を具体化できたことが成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、理論研究に基づいた資質・能力の規定、実践研究に基づいた資質・能力スタンダードの精緻化、資質・能力の育成を目指した授業像の構築、の3点にある。

本研究の社会的意義は、現場教員が自身の実践と関連づけながら、資質・能力を育成するための音楽科授業の普及が期待できる点にある。今回、発達特性を生かした資質・能力スタンダードとその育成のための授業デザインについては単元パッケージを保存したQRコードを掲載した「音楽科評価のためのリーフレット」を作成した。このリーフレットが広く現場教員に渡ることによって、いつでもどこでもアクセス可能な授業パッケージとして展開されていくことを期待する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to construct of lessons in music class to develop ability that should be cultivated in music classes in elementary school and junior high school. The following three points were derived as research results: First, we clarified the differences in the content and methods of children's cognition at each developmental stage. The second point was to refine the standards for abilities in expressive and appreciation activities, taking into account developmental characteristics. The third point is to derive a perspective on lesson design to develop these abilities.

In conclusion, the results of this study were that by clearly showing the differences in abilities that arise as a result of development in the areas of expression and appreciation, it was possible to concretize the systematization of the abilities that should be cultivated in music classes, and to develop a music class program to cultivate them.

研究分野：音楽科教育

キーワード：音楽科 資質・能力 授業デザイン 発達

1 . 研究開始当初の背景

問題の背景の一点目はコンピテンシー潮流の只中における音楽科の資質・能力の曖昧性にある。平成 29 年学習指導要領改訂により、育成すべき資質・能力が明らかになったものの、現場教員にとっては、具体的に音楽科で何を育てるべきか、その能力を読み取ることは困難を極めていいる。背景の二点目は、これまで学校音楽教育では、就学前から高等学校に至るまで一体どのような学力が育成されるのかについて、明確にされてこなかった点にある。

公教育における学校音楽教育の目的は、すべての子どもたちに音楽科の学力を保障することである。しかしながら前述したように音楽科では指導内容や育成すべき学力の曖昧性が子どもたちの系統的な成長を阻んできたといえる。本研究において、理論と実践に基づいて資質・能力モデルが明確に提示された暁には、それに伴って音楽科授業が大きく変わることが予想される。資質・能力の育成を目指した音楽科授業の変革は子どもたちに確実に音楽科の学力を保障することに貢献する。

2 . 研究の目的

本研究の目的は、実践研究の蓄積とその分析を通して、音楽科における資質・能力モデルを構築し、それらを系統的に育成することを目指し、小学校・中学校における音楽科の授業プログラムを開発することである。

3 . 研究の方法

- (1) 共同研究者および研究協力者と資質・能力の枠組みを共有した上で、音楽科における資質・能力のモデルを構築する。
- (2) 資質・能力モデルを意識した音楽科の授業実践の試行及び蓄積を行う。
- (3) 実践分析を通して発達段階別に資質・能力の育ちの具体について検討する。
- (4) 表現活動および鑑賞活動において、小学校および中学校でその認識や表現過程にどのような違いがみられるのかを明らかにする。
- (5) 資質・能力を育成するためには、音楽科の授業はどうあるべきか、授業デザインの視点を導出する。
- (6) 以上を踏まえ、音楽科で育成すべき資質・能力およびその授業デザイン、評価計画についてまとめたリーフレットを作成する。

4 . 研究成果

(1) まず音楽科における資質・能力のモデルを構築した上で、研究協力者に音楽科授業実践を依頼し、授業分析を通して発達段階別の資質・能力の具体について明らかにした。研究授業は、サン=サーンス作曲《動物の謝肉祭》より 水族館 を教材とした図形楽譜づくりの鑑賞授業である。対象は小学 3 年、小学 6 年、中学 3 年とし、それぞれ同じ教材、同じ学習過程を計画し、子どもたちの認識の内容や方法にどのような違いが現れるのか、分析した。分析の結果、認識内容については、小学 3 年は旋律や単独の楽器の音色など単一の要素に注目、小学 6 年ではそれぞれの楽器の音色の関連や音の重なり注目、中学 3 年では楽曲全体の構造に注目する姿がみられた。

これらの発達特性を踏まえた上で、批評に関わる学年別スタンダードの精緻化をはかった。小

学校中学年では指導内容である特定の諸要素を手がかりに、具体的なイメージをもって楽曲をとらえることができ、中学校になると、楽曲を成り立たせている諸要素を相対的重層的にとらえ、それらを根拠として、その楽曲ならではの特質をとらえることができる。

(2) つぎに表現活動における発達特性を明らかにした。具体的には、小学4年および中学1年において、同一教材で器楽授業を実践し、そこで働く能力にはどのような違いがみられるのか、明らかにした。分析の結果、小学4年では、身体を通した「コミュニケーション」を土台として演奏の工夫に関する「発想」の能力が常に作動することが明らかとなった。一方、中学1年では、常に「手段と結果の関係づけ」の能力が働き、それがイメージを表現するための「技能」を更新する起動力となって表現活動が発展することが明らかとなった。

以上より、本研究では、鑑賞および表現それぞれの活動領域において、発達による資質・能力の違いが明確になったことで、発達段階を意識した資質・能力のスタンダードを具体化することができた。それらの研究成果を踏まえ、音楽科における資質・能力の育成を目指した授業デザインの普及を目指したパンフレットを作成した。「子どもの資質・能力を育てる音楽科の評価」と題し、「音楽科における評価の観点の趣旨」「単元における評価規準の立て方」「資質・能力を育む音楽科の授業デザインの視点」「単元パッケージ」などの項目から成る。「単元パッケージ」にはQRコードを貼り付けて「指導案」「ワークシート」「比較聴取音源」が保存されたドライブにリンクしている。指導案やシート類を含めたパッケージをオンライン上でデータとして提供することで、より現場で資質・能力を意識した音楽科授業が展開されることが期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 清村百合子	4. 巻 6
2. 論文標題 器楽授業にみる表現の生成過程の比較 小学4年生と中学1年生の場合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校音楽教育実践論集	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清村百合子	4. 巻 5
2. 論文標題 音楽の認識内容にみられる発達特性 小3・小6・中3 同一教材による鑑賞授業の分析を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校音楽教育実践論集	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 清村百合子
2. 発表標題 器楽授業にみる表現の生成過程の比較 小学4年生と中学1年生の場合
3. 学会等名 日本学校音楽教育実践学会第27回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 清村百合子
2. 発表標題 音楽の認識内容にみられる発達特性 小3・小6・中3 同一教材による鑑賞授業の分析を通して
3. 学会等名 日本学校音楽教育実践学会第26回全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	衛藤 晶子 (Eto Akiko) (60637669)	畿央大学・教育学部・教授 (34605)	
	三輪 雅美 (Miwa Masami) (70563914)	名古屋柳城女子大学・こども学部・准教授 (33945)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------